

## 傷を読んで

情報工学科3年 岡野 七海

この本の著者の乙一さんは私が最も尊敬している小説家です。彼はせつなさの達人と称され、黒乙一、白乙一とも呼ばれる、残虐さや凄惨さを基調とした黒々としたストーリーと、切なさや繊細さを基調とした清々しいストーリーを書き分けています。どちらのストーリーも内容が奥深く、また少し乙一さんの非人間的な考えが伺えたりして、読み始めるとおもしろくなって止められなくなります。私が読んだ数ある彼の作品の中で1番好きなのが“傷”という話です。この話は白乙一の部類にあたり、とても人気が高いので映画化もされています。

主人公の「オレ」は小学生の男の子です。彼の担任である特殊学級の先生と同じで、私も彼への第一印象は「凶暴で喧嘩っばやい問題児」でした。しかし読み進めていくと、喧嘩の理由がいじめられている子を助けるためだったりと隠れた優しい一面を知ることができ、彼に好意を持てるようになりました。担任の先生や特殊学級の仲間も彼と関わっていく中でそんな彼の一面を見てだんだんと慕うようになります。

そんな中で「オレ」は転校生の男の子、アサトに出会います。はじめ、私はこのふたりがどうしてすぐに仲良くなれたのか疑問でした。なぜならアサトは、無口でおとなしい「オレ」と全く正反対な子だからです。でもあとでよく考えると逆にそれが良かったのかもしれないと思います。自分もっていないものを他人から見つけることは、大きな刺激であり、お互いの人間性を上げるとよく言われます。実際アサトも「オレ」も話のはじめと終わりでは全く別人のように変化しています。ふたりが互いに助け合いぶつかり合っていく中でそれぞれのつらい過去から立ち直り、考え方も前向きになったのでしょう。

私が「オレ」と同じ状況にいたら、自分とは全く正反対のタイプのアサトにいきなり話しかけたりなんてしないと思います。きっとほとんどの人が私と同じ考えだと思います。しかし彼はそんなアサトに話しかけ、それがきっかけで仲良くなり、ふたりの間には大きな絆が生まれました。私はそんな突発的な彼の行動に感心し、また、真似できたらなと思いました。

アサトは人の傷を自分の身体に移す事ができるという特殊な力をもっています。人が傷つくことを極端に恐れる彼は、その能力を使って他人の傷を全て自分のものにしてしまいます。「アサトはどんなに暑い日でも長袖長ズボン。常に肌の露出避けていた。」と書かれてあることから、その服の下には他人から自分の体に移した傷が無数にあることが想像でき、おもわずゾッとしてしまいました。

「傷も痛みもふたりで割って半ぶんこだ。」これは、「オレ」がアサトに向かって言った言葉です。この言葉がなによりも1番ふたりの絆の深さを表していると思います。この言葉を聞いたアサトは、今までひとりでためこんできたたくさんの傷の半分を「オレ」に預けま

した。彼が「オレ」に対し心を開き、誰よりも信頼しているとゆうことが伝わってきます。  
相当の覚悟だったと思います。

このようなお互いがお互いを思いやって支えあっていける関係は素晴らしいと思います。  
いろいろ考えさせられ、読み終わると切なくなる乙一さんらしい作品だなと思いました。